

【ポスター発表】

多職種連携に向けたリフレクション体験学習の効果と課題

○ 徳島文理大学 氏名 藤田益伸 (7316)

キーワード：専門職連携教育・体験学習・リフレクション

1. 研究目的

質の高い在宅ケアを展開する上で多職種連携は不可欠であり、その実現に向けて大学および実践現場において専門職連携教育（IPE）が重視されている。日本では2015年に多職種連携コンピテンシーとして、①患者・利用者・家族・コミュニティ中心、②職種間コミュニケーション、③他職種を理解する、④職種役割を全うする、⑤関係性に働きかける、⑥自職種を省みる、の6点が提示されている。そして、6つのコンピテンシーを強化するための、職域を越えて相互作用する体験を伴ったIPEが必要とされている。

上記のうち⑥はリフレクションといい、自職種の思考、行為、感情、価値観を振り返り、複数の職種との連携協働の経験をより深く理解し、連携協働に活かすことができる、と定義される。特に、在宅ケア場面では固定化された自職種の役割の遂行にとどまらず、お互いの専門職の役割を越えた支援を行う役割解放が多くみられ、他職種との協働の中で自他の役割を省察し、臨機応変に対応する能力が必須とされる。近年は多職種連携に向けて、顔の見える関係形成に向けた交流会やICTを用いた情報共有の仕組みの構築が散見されるようになった。しかし、相互交流の中での自他の思考・感情の揺れ動きといったリフレクションに着目した研修はあまりみられない。そこで、専門職が省察的实践者としての自覚を促し有機的な連携体制の構築を実現するために、実践現場で活用可能な体験学習を用いたリフレクション研修に意義があると考えた。

本研究は在宅ケアの専門職を対象に、リフレクションに焦点を当てた体験学習を実施し、その効果・課題について探索的に検証することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

方法 A市の包括的継続的ケアマネジメントの一環として、圏域内の介護サービス事業所を対象として研修を開催した。研修時間は1時間30分で、事前調査5分、IPEに係る講義15分、体験学習40分、振り返り15分、まとめ10分、事後調査5分の順に実施した。ラボラトリー方式の体験学習方式を採用し、ゲームと振り返りを通じた体験学習を行った。参加者 参加者数は121名であった。職種の内訳は、相談援助職56名、介護職6名、看護職6名、リハビリ職4名、その他49名であった。

測定 藤田(2016)の連携リフレクション尺度を用いて、下位項目の「リフレクション」「利用者本位」「配慮の伝達」の研修前後の得点変化を検証した。

3. 倫理的配慮

研究目的と目的外使用をしないこと、収集したデータは匿名性の確保すること、連結不可能匿名化により第三者からアクセスできないようデータを保存することを説明し、同意が得られた参加者を対象に研究を実施した。なお本演題に関連して開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

研修前後の連携リフレクション尺度の変化について、「リフレクション」は研修前 17.8 から研修後 19.1 と 1%水準で有意に得点が増加した。「配慮の伝達」と「利用者本位」はそれぞれ 8.2 から 8.3、19.6 から 19.8、と有意差はみられなかった。職種、経験年数による差異も認められなかった。

次に研修後の下位尺度得点について、指標ごとに標準化したz得点を基にWard法によるクラスター分析を行った。各クラスターの解釈可能性を考慮して、全般的な得点の上位群 30 名、中位群 40 名、下位群 32 名の 3 クラスターを抽出した。

3 クラスターごとに研修前後の得点変化を検討した結果を表 1 に示す。上位群は 3 項目とも有意な得点上昇が認められた。中位群はリフレクションのみの上昇がみられた。下位群はいずれも有意差がみられなかった。

表 1. 群別の研修前後の得点変化

	下位尺度	研修前	研修後
上位群	リフレクション	20.1	22.9
	利用者本位	21.5	22.8
	配慮の伝達	9.0	9.4
中位群	リフレクション	18.4	19.4
	利用者本位	19.9	19.8
	配慮の伝達	8.2	8.1
下位群	リフレクション	14.8	15.1
	利用者本位	17.6	17.0
	配慮の伝達	7.3	7.4

5. 考察

研修後にリフレクション得点が増加し、短時間の体験学習であっても連携促進に一定程度の効果が認められた。特に上位群は全ての下位尺度において得点が増加がみられた。一方、下位群には有意差がみられなかった。群間の変化に違いが生じた要因として、リフレクションの深度の差異が想定される。つまり、上位群は他職種との相互作用の中で、行為の振り返りと自らの経験の関連を省察し本質的な諸相への気づきを得られたため得点が増加した。下位群は相互作用の体験について表層的な振り返りしか行わず、自らの経験との関連を深く省察するに至らなかったため得点に変化がなかったと考えられる。

体験学習の効果を上げるには、リフレクション方法を学んで日常的に実践する行動形成が要になる。リフレクション・プロセスを細分化して、短時間のエクササイズを実践すること、それにより下位群にも省察の深度が深まるか検証することが今後の課題である。

引用文献 藤田益伸 (2016) 「在宅ケアにおける連携リフレクション尺度の作成」『ホスピスケアと在宅ケア』24(2), 92-99.